

Весна в Хонго



本郷の春

ウラジーミル・ナボコフと亡命ロシア作家たちをめぐる
連続講義の記録

The Spring in Hongo



沼野充義・毛利公美・奈倉有里 編

2011

東京大学文学部 現代文芸論・スラヴ文学研究室

目次



はじめに 沼野充義……………3

キャサリン・T・ニェポムニヤシチー Catharine T. Nepomnyashchy

(コロンビア大学バーナード・カレッジ教授)

◇「プーシキンとく黒」 翻訳 高橋知之……………7

ダヴィド・シュライヤー=ペトロフ Давид Шраер-Петров

(ソ連出身、アメリカ在住のロシア語作家)

◇「ロシアの作家から見た日本の知識人」講義概要 奈倉有里……………19

◆ 短篇小説「ワタナベ・アキラの恋」 翻訳 奈倉有里……………22

マクシム・シュライヤー Maxim Shrayer

(ボストン・カレッジ教授、ロシア/ユダヤ文学研究者・作家)

◇「文学的バイリンガリズム—宿命か、選択か」講義概要 奈倉有里……………34

◆ 自伝的長編小説『アメリカを待ちながら——亡命の物語』

Waiting for America (英語) より 翻訳 守屋愛……………37

アンドレイ・バビコフ Андрей Бабилов

(ナボコフ研究者、ナボコフ戯曲集『モルン氏の悲劇』編者)

◇「劇作家ナボコフ」翻訳 毛利公美……………50

マリヤ・マリコワ Мария Маликова

(ロシア科学アカデミー・文学研究所研究員、詩人文庫版ナボコフ詩集編者)

◇「ロシア詩人としてのヴラジーミル・ナボコフ=シーリン」

翻訳 竹内恵子……………67

ユーリイ・レヴィング Юрий Левинг (ダルハウジー大学准教授)

◇「『賜物』講義概要精読への序章」講義概要 奈倉有里……………109

Весна в Хонго / The Spring in Hongo

本郷の春

Edited by M. Numano, K.Mouri, and Y.Nagura

Dept. of Contemporary Literary Studies / Dept. of Slavic Languages and Literatures

The University of Tokyo, 2011

Содержание / Contents

Introduction Mitsuyoshi Numano	3
Catharine T. Nepomnyashchy (Columbia University)	
◇Pushkin and Blackness (Translated from English by Tomoyuki Takahashi)	7
Давид Шраер-Петров (Писатель)	
◇Японский интеллигент глазами русских писателей (Резюме лекции Юри Нагура)	19
◆Рассказ, Любовь Акира Ватанабэ (Перевод с русского Юри Нагура)	22
Maxim D. Shrayer (Boston College)	
◇Литературные двуязычие как судьба и как выбор (Резюме лекции Юри Нагура)	34
◆ An Excerpt from <i>Waiting for America: A Story of Emigration</i> (2007) (Translated from English by Ai Moriya)	37
Андрей Бабилов (Культурный центр Украины в Москве)	
◇Драматург Набоков (Перевод с русского Куми Моури)	50
Мария Маликова (Пушкинский дом, РАН)	
◇Владимир Набоков-Сирин как русский поэт (Перевод с русского Кэйко Такэути)	67
Юрий Левинг (Dalhousie University)	
◇Попытка медленного чтения «Дара» (на материале первой страницы романа) (Резюме лекции Юри Нагура)	109

文学的バイリンガリズム—宿命か、選択か

マクシム・シュライヤー

概要 奈倉有里*

二十世紀初頭以降に増加した亡命や移民に伴い、バイリンガル作家の数も急激に増加しました。二つの言語を持つことになった作家が、文学のために用いる言語をどう選択していったのか、彼らの「宿命」と「選択」、また両者の相互関係という観点から、いくつかの例を挙げて説明したいと思います。

十九世紀にも例が無いわけではありません。パーヴェル・スヴィニイン（1787-1839）は、1803年からロシア語作家として活動を始めましたが、その後、外交官としてフィラデルフィアに滞在し、アメリカの雑誌に英語で記事を書き、英語の著作を出版しました。そして帰国後は、『祖国雑記』などで再びロシア語での執筆を行っています。当時のロシアにも、英語を介する知識人はもちろんいましたが、スヴィニインのようにアメリカ文学界にまで入り込むなどという例は非常に珍しいものでした。

また、フョードル・チュッチェフ（1803-1873）は、ロシア語で詩作をするかたわら、外交官としてドイツに滞在し、ドイツ人の女性と結婚しています。家庭での会話はドイツ語でした。初期から中期にかけてのチュッチェフの詩が保守的なのは、彼がロシア語を日常会話に用いてなかったということとも関係しています。チュッチェフはドイツに住み、ドイツ語で日常生活を送るという「宿命」を持ちながら、ロシア語（時にはフランス語）で詩を書くという「選択」をしたということになります。

内戦・革命期に訪れた亡命の「第一の波」に伴い、バイリンガル作家は急増します。フランス人と結婚しフランスに移住したエルザ・トリオレ（1896-1970）は当初ロシア語で作家活動をしていましたが、途中からフラ

* 2010年3月23日に行われたマクシム・シュライヤー氏によって行われた露文講義を聞き取り・要約。

ンス語に移行します。これは「宿命」が「選択」に直接影響した例と言えます。彼女はこれ以降、主としてフランス語のみで書く作家として成功します。また、彼女より少し年下のナタリー・サロート（1900-1999）の場合は、まだ幼い頃にフランスに移住したということもあり、「宿命」的な要素がかなり強いケースとして挙げられます。

ゲオルギー・アダモーフイチ（1892-1972）やボリス・ポプラフスキイ（1903-1935）などの場合はどうでしょう。彼らはフランス語を十分に習得していましたが、アダモーフイチにはフランス語の著作もあります。しかし彼らはそれでもやはり、基本的に最後までロシア語で作品を書くという姿勢を保ち続けました。ポプラフスキイの著作にはフランスモダニズムの影響が顕著に見られます。彼らはフランスに暮らしフランス語で生活をするだけでなくフランス文学の影響も受けながら、ロシア語で作品を書くという「選択」をし続けたわけです。

ウラジーミル・ナボコフ（1899-1977）の言語は、「宿命」と「選択」の連続です。幼い頃から英語、続いてフランス語を習得し、自らの意思でベルリンに住み、フランス語での著作に続き、イギリスでの文学作品コンクールに応募するために英語で書いた『セバスチャン・ナイト 真実の生涯』に始まり、一連の英語作品を書き上げます。

ヨシフ・プロツキー（1940-1996）もバイリンガルとして知られていますが、彼の場合はまた少し様相が異なっています。ほとんど独学で英語を習得した彼の言葉には、イギリス英語とアメリカ英語が混在していました。彼の英語の発音を聞くとそれがよくわかりますし、彼の英語の詩作を見ると、発音の混同は押韻にも現れています。

ラヘル・ブルーシュタイン（1890-1931）は、若いころロシア語で詩を書いていました。その後イディッシュ語に移行しますが、詩集には当初ロシア語で書かれていた詩のイデッシュ語訳も入っています。彼女のような経路をたどった詩人はほかにもいますが、このような場合、「移行」したとはいえ、作品をよく見ていくと、普通に考えられているよりも二重言語性が強いことがあります。つまり、イディッシュ語に移行したあとでも、自身の中でロシア語で形になってきた詩をイデッシュ語に翻訳する作業を行っているのではないかと思われるほど、ロシア語・ロシア文学の影響が色濃く現れているこ

とが珍しくないのです。

レフ・ローセフ（1937-2009）はどうでしょう。アメリカに移住した彼は、論文やエッセーなどを英文で書き残していますが、詩は一貫してロシア語で書き続けました。自らの詩の英訳には少し携わりましたが、英語で文学作品を書こうとはしませんでした。

一方、ここ十年間に目立つようになった現象として、幼い頃両親と共にアメリカに渡り、英語作家になったロシア系の移民も存在します。しかし彼らは、家庭での両親との会話というごく限られた世界ではロシア語を使用したかもしれませんが、それ以外ではずっと英語の環境にあって、英語で書くということは、ほぼ完全な「宿命」でした。

ほかに最近で面白い例を挙げると、20代のはじめにドイツに移住しドイツ語作家になったウラジーミル・カミーナーもいます。彼は母国語であるロシア語では作家活動を行っていません。

ここで挙げたような例を見ながら、彼らの人生と作品に用いる言語の選択を考えていくとき、それぞれが実に様々に、自らの「宿命」を抱え言語を「選択」していることがわかります。バイリンガル作家の書いた作品には、そのいたるところに「宿命」と「選択」の痕跡が残っているといても過言ではありません。文学作品を理解するためには、ただ言語を分析するだけではなく、その言語「選択」の裏にある作家たちの心理に目をやる必要があります。ことも多いと思います。

最近よく話題になる翻訳者リアンナ・ルンギナ（1920-1998）は、ドイツ・パレスチナ・フランスで少女時代を過ごし、ドイツ語とフランス語は母国語レベルで身につけていました。1933年にソヴィエト連邦に移住、文学作品のロシア語への翻訳をするようになります。つまり、翻訳という仕事の上で彼女が表現に用いる言語は主にずっとロシア語だったわけですが、晩年になって出した回想録《Les saisons de Moscou》は、フランス語で彼女が口述し、書き取られたものでした。十代からずっとロシア語圏で過ごしていながら、です。

「宿命」と「選択」、その多重性と人間の心理をあわせて考えるとき、私は「人が言葉を操っているのか、言葉が人を操っているのか」という問題について考えずにはられません。

本郷の春

Весна в Хонго / The Spring in Hongo

A Series of Lectures on Vladimir Nabokov and Writers in Exile

——ウラジーミル・ナボコフと亡命作家たちをめぐる連続講義の記録——

沼野充義・毛利公美・奈倉有里 編

Edited by Mitsuyoshi Numano, Kumi Mori, and Yuri Nagura

発行 東京大学文学部現代文芸論研究室・スラヴ語スラヴ文学研究室・

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行日 2011年3月25日

The Department of Contemporary Literary Studies

in collaboration with

The Department of Slavic Languages and Literatures

The Faculty of Letters, The University of Tokyo

7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033 Japan

March 25, 2011
